



Is Race a Universal Idea ?

Transcending the Western Paradigm

人種概念の 普遍性を問う

西洋的パラダイムを超えて

Takezawa Yasuko

竹沢泰子=編

新たな共通語としての人種概念をめぐり、
その歴史的検証と包括的理解に向けて
人文科学と自然科学の研究者が
初めて協働した画期的成果。
圧倒的な欧米ヘゲモニーがもたらす
狭隘な人種理解にたいし
日本、アジア、アフリカから、
地域を超えた強烈なオルタナティブを呈示する。

人文書院

現在起こりつつある現象やこれから生じるかもしれないと予感される事象について、これが、歴史に照らして何らかの兆候であるのか否か、それをさぐる手だてさえ失いかねない。

本論では、時代も地域も異なるそれぞれの研究で語られる「人種」(あるいはここで「人種」と呼ぶもの)を、「小文字の人種 race」、「大文字の人種 Race」、「抵抗の人種 (RR)」という三つの位相の下に包摂することを試みる。異なる文脈で語られる「人種」、一見何の接点もないかのようにみえる「人種」が、その根底において互に相互に接合されうるか——それを少しでも読み解く可能性を模索することが本章の狙いである。

第一節 人種概念を洗い直す

「race」と「人種」

はじめに、本章で「race」の訳として「人種」という語を用いることについて、若干の説明しておく必要があるだろう。「race」の訳は、明治初期「種族」という語などもあてられていたことから、「race」と「人種」は同一でないと、この語の今日的使用に問題がないという議論がある。いうまでもなく、「race」と「人種」は必ずしも一対一の関係にあるわけではない。最近日本において「レイス」といったカタカナ表記を目にする機会が増えたが、そうした場合、生物学的人種と区別して「レイス」が用いられている。社会的構築主義に立つ場合でも、では「レイス」と異なる「人種」とは何かについて明確な概念上の差異化がなされているわけではない。私が、日本という社会的脈絡において一連の研究で解体し洗い直そうとしているのは、学術書も含めてもっとも一般的に流通している、人間集団の生物学的分類概念として用いられてきた「人種」という、この日本語そのものに含まれる意味なのである。

これは、たとえば『広辞苑』(第五版)の「人種」の項目に記される「(race) 人間の生物学的な特徴による区分単位。皮膚の色を始め頭髮・身長・頭の形・血液型などの形質を総合して分類される」といった今日的用法に限らないのである。「人種」という日本語には、古くは『神道集』(一三五八年頃)にみられるように、「人類のたね」「ひとだね」という意味あいがあった。しかしわれわれが重視すべきは、西洋科学として人種分類論が幕末に紹介されたときには、すでに、「人種」という語が、「ひとだね」という意味ではなく、身体形質にもとづく人間集団の生物学的分類

という、今日的な用法で用いられていたという事実である。たとえばC・リンネの分類を紹介した渡辺華山による『慎機論』(一八三八年)では、「一地球の中、人種四種に分り」と「人種」という用語が用いられており、また明治七(一八七四)年に文部省が発行したイギリスの百科全書の訳本『百科全書 人種篇』(秋山恒太郎訳)でも「人種」があてられている。また確かに坂野論文が主張するように、生物学的分類としての日本語の「人種」には、とくに初期は、身体形質のみならず、能力、気質など、「民族」と重複する意味が含まれていたが、これは「Race」についても同様である。すなわち、黒人にしてもユダヤ人にしても、生まれによって身体の内・外すべてが異なるように決定づけられると考えられていたのである。人種という語の変容や、「Race」との差異を差し引いても、われわれは、明治初期から平成の現在まで、教科書や事典などをおして国民的に刷り込まれてきた「人種」概念と向き合い、この語を洗い直す必要があるのである。

人種概念の内在的特性

「人種」は、近年ではその生物学的実在性が否定され、社会的構築物にすぎないという知見が浸透してきた。その場合、本書のスメドリー論文も指摘するように、身体形質の差異が存在する、という認識が、一般の大前提とされている。しかし可視的な身体形質とみなされるものを人種を同定する基準に位置づけているかぎり、欧米式の(とくに西欧の伝統的世界観と近代の科学的人種主義 (scientific racism) によって創出された)人種概念にもとづく差別のみが、「人種差別」であるという認識から逃れられない。いいかえるならば、人種概念の理解をそこに定位させてしまえば、主流集団からみて身体的には非可視的でありながら、しかし社会的には抑圧されている集団の問題をどう擱い上げるかという課題が残るのである。

そこで、欧米以外の日本や他地域の経験を積極的に射程に含めた人種概念の理解のありようが求められる。結論を先取りするならば、人種概念 (idea of race) が内在的に抱える特性として、以下の点が指摘できるだろう。

第一に、人種の資質とされるもの(可視的および非可視的身体要素、気質、能力など)が、系譜的に世代から世代へと第一に、自己・他者認識の境界を引く主体が他者集団に対して排他性を示す傾向が強く、とくに古典的な人種概念においては集団間に明白な序列階梯が想定されること。

第二に、自己・他者認識の境界を引く主体が他者集団に対して排他性を示す傾向が強く、とくに古典的な人種概念においては集団間に明白な序列階梯が想定されること。

第三に、その排他性や序列階梯が政治的・経済的あるいは社会的制度や資源と結びついて発露するため、単なる偏見やエスノセントリズム(自民族中心主義)にもとづく差異の認識にとどまらないこと、つまり組織的な差異化であり利害と関係しやすいこと、である。

なぜあらゆる差別やステレオタイプのなかで、人種やジェンダーに関するものがとりわけ根強いのであろうか。それは人種・ジェンダーの双方が身体を媒介に決定づけられている、換言すれば、生まれによって決まるものであり、(容易に)変えることができない、と考えられているからである。なお、たとえば他の条件を満たしても、単なる偏見やエスノセントリズムにもとづいて他者化される集団は、ここでは人種概念の対象に含めることはできない。あくまでも社会の制度や資源あるいはそれらをめぐる社会的脅威と絡んで生じる集団間の葛藤や対立が対象になる。さらに人種概念は、系譜的であると信じられるあらゆる形態の差別を含むものではない。たとえば日本における「キツネ憑き」^{フキンコ}民俗伝承などは、「血すじ」「家すじ」という誤謬の言説にもとづくが、「キツネ憑き」とされる家々は、集団を形成しているわけではなく、「人種」に含めることはできない。

もちろんこれらの点をメルクマールとして、人種概念の外縁についてつねに厳密な線引きが可能というわけではない。たとえばここに挙げた「集団」ひとつをとっても、その成立条件に単純な方程式が描けるわけではない。もともと、英語の「race」の古く用法では、血統や出自が第一義的な定義であったし、また身体的差異に限定せず、遺伝的に異なる、とみなされる側面や出自を含める定義が先行研究にないわけではなく、(eg. Rex 1986; Miles 1989)。しかしこれらの理論は、主体として想定される白人と、「一滴の血の法則」によって外見上白人でありながら社会的に黒人と定義される人々やヨーロッパのなかでのユダヤ人との関係を前提に構築されたものといつてよい。先に挙げた人種